

同じことは同じではない

子どもがいつまでも同じことをして楽しんでいると、「いつまでそんなことをしていれば気が済むの」と、軽蔑するような、非難するような言葉を投げつける親があります。

こういう親の言葉からも、飽きっぽい性質が子どもの中に作られていきます。親は“同じこと”と言いますが、実は外見が同じに見えるだけで、内容は決して“同じではない”のです。

同じ話を何度聞いても、いや、くり返し聞くたびに、おもしろさの度合いを増しているのです。同じ本を読む場合にも、二度目には二度目の、三度目には三度目の新しい感動と理解があるのです。

幼児が作っては壊し、作っては壊しているのは、その間に、対象物のいろいろな反応を確かめているのです。何回くり返しても同じ結果が出る。これも幼児にとって驚異であり、発見であります。そしてそこに一つの原理をつかむ。つまり、幼児はいろいろな物事の性質を究める実験をしているのです。

幼児の伸びていく生命のエネルギーが、この大変な実験にいどんでいるのです。そして、自分もかつてそのようにして現在のおとなになっているのだということを、わたしたちは忘れがちです。しかし、世の大科学者というのは、実は、この幼児の心を失わなかった人でした。それを長く保ち続けて、くり返しに耐えられる人だけが、大科学者に

なりえたのです。

ですから、次々と変わった物語を聞かせたり、新しいおもちゃを与えたりすることに努力し、同じことのくり返しに対してまゆをしかめたり禁止したりする態度は、「しっかりした人になってくれ」と願いながら、その反対の人間に育てているのだと言えましょう。

毎日、喜んで聞く同じお話を、子どもがいやと言うまでは、親もまた心をこめてくり返してやりましょう。いやいやながらするのは、いかにくり返しが好きな子どもでも、すぐに嫌うようになるでしょう。それは、将来への基礎づくりをしている子どもの無意識の努力を、殺してしまうことになります。

子どもは、その全身全霊を傾け、目を輝かせてわたしどものお話を聞きます。わたしどもおとなにとって、これほど尊い聞き手がこの世にあるでしょうか。話し方に上手下手はないと思います。心をこめて、愛情をこめて話しさえすれば、子どもは喜んで聞いてくれます。下手なら下手で、話し方の練習をさせてもらうつもりで話してやりたいものです。

なお、こうして同じ話をくり返して聞くことによって、幼児はおのずから日本語の構造というものを体得します。ですから、読んで聞かせるにも、内容、表現とも、できるだけしっかりとした文章のものを選ぶことが望ましいのは、言うまでもありません。